

函館ワンちゃん物語 ⑦ ～命の授業 2～

教師2「次に、一枚の写真を見せます。この写真を見て感じたことを自由に発表してください。」

実に悲しい目で、こちらを見つめる犬の写真（抑留所で処分される寸前の犬）を見せ、感想を交流する

児童5「何か、すごく悲しそう。」

児童6「かわいそう。なんだか、寂しそう。」

教師2「実はこの写真、飼い主に捨てられ、今まさに処分される、つまり殺されてしまう犬の写真だったんです。」

児童の間から驚きの声上がる。

いたるところで、「ひどい」「かわいそう」「たすけてあげたい」という声が聞こえる。

さらに、野犬抑留所の様子を伝える。

最後に、函館には、捨て犬・捨て猫を保護し、譲渡する活動をしている動物愛護団体アニマルレスキューがあることを教える。

洋一「今日の勉強の最後に、一つの記事を読みます静かに聞いてください。」

≪「生まれてきてよかったね。今度 は幸せになるんだよ。」

まだおびえているのか、新しい飼い主の腕の中で震えているシバイヌを、動物愛護団体「函館アニマルレスキュー」のメンバーが優しくなでた。

七歳の雌。市内をうろついているところを捕獲され見晴町（みはらしちょう）の野犬抑留所に運ばれた飼い主が現れないまま一週間で檻の中で過ごし、処

分される直前に、アニマルレスキューが引き取った新しい飼い主となった市内の女性は「引き取ったからには最後まで面倒をみますよ。」と約束した。

アニマルレスキューは、捨てられたり、抑留所に収容されたりした犬や猫の新しい飼い主を探す活動を続けている。

「子犬が産まれるたびに連れてきたり、成犬になると手放す」など、無責任な飼い主が後を絶たない。アニマルレスキューの代表は、月に数回、山あいにある野犬抑留所へ向かう砂利道を車で走る。

「今助けに行くからね。待っててね。」

これまでに、六百七十四匹の犬と猫の命が助けられた。

「引き取り手がなければ消える命を守りたい。かけがえのない命、命あるものを一匹でも多く助けたい。」という強い思いが、レスキューの日々の活動を支える。≫

洋一「次に、この映像を黙って見てください」

(映像)

≪抑留所に向かう車。車窓から見える景色、やがて野犬抑留所に着く。

一步一步、近づいてくる建物。

やがて、野犬抑留所の檻の前に立つ。

鉄格子の奥に黒い影がうずくまる。≫

洋一「あなたなら、どうしますか。」

しばらくの沈黙の後、洋一が静かに語りかける。

洋一「発表はしなくていいです。自分の心の中で、自分だけに答えてください。自分ならどうするかを
・・・。」

(「函館ワンニャン物語 ⑧」へ続く・・・)